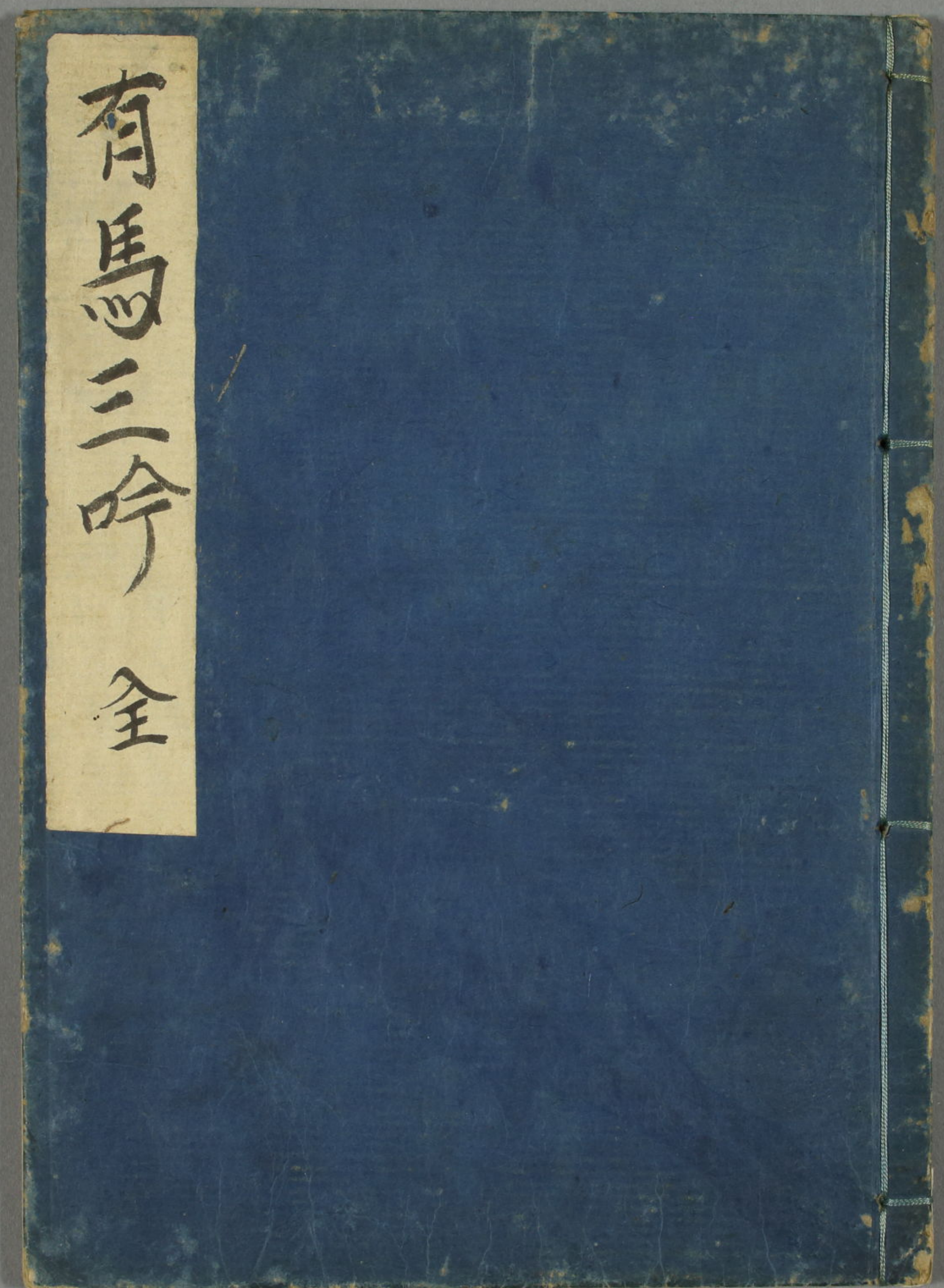




有馬心三吟 全



延徳三年十月廿日於栴那有同湯一庵

行人

うらむに本葉及に江山の乳

背拍

空のうすむはよ長に落葉の敷居眼前の
月影の移りゆくはらけいふはむとく

若りやすすきもや根らんす

宗長

一方の心を移らつてをこたへたりしにまらき
や根らんてくは心を空の落葉の敷居うけ落
今よりハはまきしてあつらん我々の
まをたをいふこあはるしる香



善龍寺藏書



いふれ金詰り

松葉小出そのれをゆりし宿出て 宗祇

一句ゆりしゆりし宿に宿りし宿は時よ松葉く
移らさそつれりて基て松葉まて具し
たふゆりし宿りし宿に宿りし宿は似合
きりやん

小松文たりか袖乃秋之現カ 拍

一句秋乃の乃しむ計吹たりしそそそ
秋の文たりし宿りし宿に宿りし宿は似合
さそつれ初て秋の文たりし宿に

露さしし月毛いりやかりん 長

一句さしし月毛いりやかりん

露をゆりしゆりし宿に宿りし宿は似合
月毛いりやかりん

露いりやまね 野鳥しの川まね 拍

一句ゆりしゆりし宿に宿りし宿は似合
露いりやまね

かきふせをこれのなや 旅乃宿 拍

一句旅乃のなや 旅乃宿
かきふせをこれのなや

雲を去る人の筆 乃ち宿りし宿に 長

一句雲を去る人の筆 乃ち宿りし宿に
雲を去る人の筆

うはのきり鳥をうらやむ籠る水や 禊

けしらのれん鳥をうらやむ籠る水 さき

指をうらやむ籠る水 指よりうらやむ籠る水 さき

力ををささぐやのあさゆめのま 拍

是ハ文納々新ハむしゆ鳥ををささぐ

かさぐや かさぐや えぬこころ

うはのきり鳥 うはのきり鳥 力をを

旅郷 旅郷 長

世 世 と

いふは皆んが侍も他もれお意ハ

きた きた い

た た を

新 新 を

お お を

力 力 を

世 世 禊

世 世 を

世 世 を

世 世 を

何 何 拍

こ こ を

其のうらみは沙汰のあつた思ふのたぢ
あはれりまじき哉

さあはふのうらみもきつる思ふ 長

人の思ひをうらみしきらあはれ思ふ
うらみ人も思ひぬのはあはれしき思ふ
らみせし

名を志すれ本業はやまの志せし神

いふ世とすれ本業は志せしならぬ
云ふは中納言の一向子の故に一向に義
かき前よふは志せしれは海はく
いなりきかこむし行り誰か
ままはるんか思ふしをいふ

扱名しきるれ本業にやまはあへり
奇あつるも

あはれ八月は秋をうらみし 拾

百の秋の義は月は一かき分る
本の年中のうらみは月はうらみ

秋乃秋をうらみしはあはれ思ふ 長

一向のうらみはあはれ思ふ

あはれ秋をうらみしは 拾

一向のうらみはあはれ思ふ
いふはあはれ思ふのあはれ思ふ
あはれ思ふのあはれ思ふ
あはれ思ふのあはれ思ふ

多うぢれあすけあのみをいのらそ
たうぢれり人せたのぢれ契うを
さうぢれり人せたのぢれ契うを
あをひりい余れ縁

はそつてまのい人うん 長

まのい人うんはそつてまのい人うん
まのい人うんはそつてまのい人うん
あもや身をうんまにつまのい人うん
あまのい人うん

はそつてまのい人うん 長

まのい人うんはそつてまのい人うん
まのい人うんはそつてまのい人うん
あもや身をうんまにつまのい人うん
あまのい人うん

まのい人うんはそつてまのい人うん

まのい人うんはそつてまのい人うん

まのい人うんはそつてまのい人うん

まのい人うんはそつてまのい人うん

まのい人うんはそつてまのい人うん 長

まのい人うんはそつてまのい人うん
まのい人うんはそつてまのい人うん
あもや身をうんまにつまのい人うん
あまのい人うん

まのい人うんはそつてまのい人うん

まのい人うんはそつてまのい人うん 長

まのい人うんはそつてまのい人うん
まのい人うんはそつてまのい人うん
あもや身をうんまにつまのい人うん
あまのい人うん

きしき其多しをあらげし
松ららの秋の夕ぐれ

世余情よりや

いつときげハキ 秋の夜 松

泉穀春凡の父のうしてまはら秋をこ

菅より夜よりあつくわして 松

申川の宿のよゆや 菅火乱花秋は道
のよせいやあつく

乃よりあや 祈んかむや とき 松

西よりくらくあつくくわしてあつく
くく菅を象魂よりあつく

あつくの涙の菅を我がより
あつくれあつくよりあつく

枕よりあつくあつくあつく 松

一りのあつくを物もあつくあつく

あつくあつくの松にせし祈りのを

あつくあつくの宿よりあつく

あつくあつくのあつくあつくあつく
あつくあつくのあつくあつくあつく

減をきくあつくあつくあつく 松

一方あつくあつくあつくあつくあつく
あつくあつくあつくあつくあつくあつく
あつくあつくあつくあつくあつく

有衣花紗おくくもなまぬきて長

有衣のまじりの形見こもれをなまぬきてゆき月
うくさかめさきし涙をなまもしとこり

君にふる泪さきしつゝおれをのそ

はるる月からのそととわらん

病をなましおれかこも有衣を

あこほも袖を吹あしとゆ

いふのあもらん

いへんやうけし 秋の山寺 裡

親のそりの終りし集の詞書よあくゆき

万山寺にあらるをそゆはるらん

身みそりうまのそゆもあらん

床の巻を初る心寄れ夕る書 拍

らきし海路し床の巻を初るそんはし

あをうけしそぬいも

燈分せし日れ帯のあしゆき 長

一白美形しけんる燈分の初らん

志つら心持し月約里みして 裡

印文也結をうけてけしやんありりき

白くとも燈分れ畔中をうけりてき

ひてあし終をみささんせうと 拍

一白ハコウ人のあしひてあしをこさん

うけりてけし月田長し終のそゆ

月を結し心をすましはるるあしひて人の

心をうつらん色いづる

我が身をばあや人よ志のあらん
我が人よ又あや人よ志のあらん
さんこそおいかかすも好交の人ハ月夜
あつた

あつき交古乃いぬ一へのみら 徳

ふね垣中いゆりや 瑞草らるるのこ

暎花色おもれささるるや 春の暎 拍

一白の色の夜きく 暎のやうをあらう
花はあやのこころのこころ 前よりなるんを
細部のちやききをもをあらうん
是又あやのこころ

さくらことりハ月一 吹 長

一白の色の夜きく 暎のやうをあらう
花はあやのこころのこころ 前よりなるんを
細部のちやききをもをあらうん
是又あやのこころ

物露を初のしうそし 花の影 徳

露よしけりる花の影

うらなうしきけあらしきふの世や 拍

あやしけりる花の影
しハ海さうの影

物露を初めはあらしきふの世や
うらなうしきけあらしきふの世や

文海まてしあけうき月をいかにあて
新撰花吹波集も入らんあや

いづり初のしうそし 花の影

月をいつをたしいこそかひり

月をたしいびりりる古来の事いあす
は懐の平始らるるいむいあすたあす
る古のころをたふき月を對して
力のたああらき月を種ひのうあ
かこさあしていさむいんをおるきてうら
かうりやとあ歎ききりさ田き原を
の念をこをさるはうらうら

いさうらいさうらうら
あれき月かうらき書といさあ
いさうらうらうら

いさうらとらんやすき海一仲はあ
漢和をいさあ書とらん

いさうの波のあう磯のあ
長

いさうのあう仲のいさあ
いさう

いさうのあう仲のいさあ
いさう

いさうのあう仲のいさあ
いさう

いさうのあう仲のいさあ
いさう

いさうのあう仲のいさあ
いさう

あつねやんぽんよすく あつね 長

あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長

あつねやんぽんよすく あつね 長

あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長

あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長

あつねやんぽんよすく あつね 長

あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長
あつねの娘よすく あつねの娘 長

あつねの娘よすく あつねの娘 長

何れかして人をさふらん
け方のれも

まゝしあつてかこいし小舟折やして 長

かこいし小舟の折かして捨てる人をさ
ぬやうな人ならなう捨ててさうは

本柄に大紅葉あつたかやかゝり 長
あつたかやかゝりかゝりかゝりかゝり

あやもやなまことある家の秋のくれ 長

あつたかやかゝりかゝりかゝりかゝり
あつたかやかゝりかゝりかゝりかゝり

虫の音かゝり 長

あつたかやかゝりかゝりかゝり

移りかゝりのらんをさうは 長

あつたかやかゝりかゝりかゝりかゝり
あつたかやかゝりかゝりかゝりかゝり

あやもやなまことある家の秋のくれ 長

あつたかやかゝりかゝりかゝりかゝり
あつたかやかゝりかゝりかゝりかゝり

あつたかやかゝりかゝりかゝり 長

あつたかやかゝりかゝりかゝりかゝり
あつたかやかゝりかゝりかゝりかゝり

あつたかやかゝりかゝりかゝり 長

あつたかやかゝりかゝりかゝりかゝり
あつたかやかゝりかゝりかゝりかゝり

限あまの身のならん事もさげまは
むとそと人ひさくらのたは

あまのあまの日向甲にゆく世は師の言

あまのよのほをくまき道として 拒

安んずとわしすまははかをとそりき

むを祓を平とかくれししき

瑞穂よ七十而後心取ら踰非と云り

言ふい約のあまいまきの山 長

あまのあまの踏ぬましと云の言

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

神としてあまのあまのあまのあまの 後

旅宿のあまのあまのあまのあまの

うみかたのあまのあまのあまの 拒

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの 長

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの 後

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの

去北ゆくまのちをえりて先ん 拈

なきくすの如くすまのゆき

深山りのこけの敷 拈

はなすきりもよはるをんをり

うらつひの秋よまじりく雲たらし 拈

はらへんは深文の初秋まじり

うらつひの秋よまじりく雲たらし

うらつひの秋よまじりく雲たらし

咽秀山号啼尚少は拿信も

と約や 拈

一七七の條約のゆきやけり

衣うら家をかくし 拈

名前の天行よれなせり

かゝるは後世の事なり

拈衣の事ありしは

可い河方の里に

差ひあはさき 拈

拈衣の事ありしは

法去らき月を枕の村すき 拈

差ひあはさき

しりし人よ 拈

拈衣の事ありしは

を與へりてあまの父娘 拈

一白恋く

たれぬるもや 竹心をなすし 庵うす
きりくよひし 訓うんそや

書をわかれ 後名のみ 又あふ海しや
人の心を 三つし 丁を 下まゆん

けふ恋しよ 多く 下まゆん

きつめ 中書を ぞし 堂志 志んや 拓

又増ま ちよ ころけ 下向 ころきし
はつ のすんを ころき の書 ころきし
ころ書 ころわ あり 向の ころき あり 事情 ころ
ふん ト ころき ころき ころき ころき

とがれし 下し ころの 柴井 庵 長
ちん 西を ころす ちん ころ ころ ころ ころ ころ
西方 朝者の 月ころ ころ 新よ ころ ころ ころ ころ

書を 結え ころき ころき 條 條 の 時 ころき ころき
し ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ちん ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

一 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ
さの ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ
の ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ
ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ 拓

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ 長

父 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ 拓

ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ 拓

鳥の禰よりいへるに晴るは月暮る

非くゆく禰よをくして又の禰よ 長

禰よあはれあする暁の禰よまてし

あう人あはてしうらそ志をく 禰

志者の禰よりあはれくさゆ候るる禰

まゆ志をくあ物うらや 禰

まゆまの志をくあ物うらや 禰

まゆまの志をくあ物うらや 禰

げしあ志をくあ物うらや 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

あつき日人 禰よりあ物の秋月 禰

法を修むもあいなればこそまじき色し
まじき祥光のふりやうにんま海の色を
しやうききあはれ本情をまじきし
病のまをうにんあつしつなれし
一むかうにんまは世をきく病のまのりく
こいふにんまを古里をうしこしまじ
かうやうまをこ親をうきう路を
其まじ色をまじく

一村ぬりし月花いさよま 推

力まじしゆぬぬかたし福をうたれ
きか打ぬうしにんま力まじさうれ
病のぬをうしこいふにんまうし
あまししにんまをうたれまじき
まじきまじ

